

## Kコレクションが誘う美本の世界 — 河村錠一郎先生の歩みとともに

2017年2月17日（金）16:00～18:00

一橋大学国立キャンパス 国際研究館3階 大会議室

江藤光紀 氏（筑波大学准教授）

河村錠一郎先生の歩みを振り返って——研究会と論集刊行を中心に

河村錠一郎 氏（一橋大学名誉教授）

Kコレクションのあれこれ——本の歴史と美本収集

[河村錠一郎先生の歩み]

1936年東京都浅草区生まれ。東京大学文学部英文科卒業、東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学。1965年一橋大学経済学部講師として着任。以後、助教授、教授に昇格。1996年新たに設立された言語社会研究科の所属となり、2000年退官。同年から帝京大学教授に着任。2015年瑞宝中綬章受章。現在、一橋大学名誉教授。

河村錠一郎先生と一橋大学とのご縁は深く、着任された29歳のときから、35年以上にわたって教鞭を執られてきました。研究領域は16世紀の詩を中心とした英文学から始まり、マニエリスム、イギリス美術へと広がっていきました。客員研究員としてケンブリッジ大学やハーヴァード大学に滞在するなかで、美しい本を実際に手に取り、各地の美術館で多くの美術品に触れた経験が、新たな展開を用意していくことになりました。

なかでも、19世紀後半のラファエル前派を中心とした世紀末芸術の紹介と研究においては、日本において先駆的な役割を果たされました。主著としては『ピアズリーと世紀末』（青土社、1980年）、『マニエリスムとバロック』（青土社、1988年）、『コルヴォー男爵—フレデリック・ロルフの生涯』（試論社、2005年）など、翻訳も多数あります。現在もエッセイや論文の執筆にあたられ、美術展の監修や講演会を通して、各地の美術館と精力的に仕事を続けておられます。

一橋大学に就職後の1970年代に、客員研究員としてケンブリッジ大学に籍をおいたことがあります。その折、日本で見かけないレアな美本を目にして買ったのがコレクションの始まりです。その頃の研究対象は文学でしたから、ただの好奇心でした。そのうちに研究の軸足がそれまでのマニエリスムからラファエル前派や世紀末文学・美術へ移り、19世紀イギリスの挿絵本や美装本の世界が素晴らしいことを知りました。

当初は、しかし、マニエリスム美術・文学に夢中でした。世界的にその方面の研究が勢いに乗り始めたところでしたが、基本的資料が日本では不足していたので、そちらの方に目が向きっぱなしでした。海外の図書館秘蔵の資料をその図書館に勤務する知人にゼロックスコピーで送ってもらったりしたものです。いまなら多くがインターネットで読めるでしょう。

1983年に新宿の伊勢丹美術館で開催された日本で最初の本格的な「ピアズリー展」では、『サロメ』の挿絵入り初版が出品されなかったのを残念に思ったものです。同書はその後イギリスから購入しました。それからは、狙いを定めてあれやこれや少しずつレアな美本を買うようになりました。フランス、オランダ、ドイツの本にも触手を伸ばしました。ただし、私が最初にケルムスコット (Kelmscott) 版の本を買ったのは神保町です。世界三大美書のひとつであるケルムスコット版『チョーサー作品集』を手に入れる最終目標はどうに捨てましたが、ケンブリッジで買った最初のささやかな美本は、私にはそれ以上の重みがあります。

#### [一橋大学「芸術と社会」研究会]

河村錠一郎先生とそのゼミのOB・OGが中心となって、2008年の夏に一橋大学「芸術と社会」研究会が発足しました。学部として、商学部、経済学部、法学部、社会学部を擁する一橋大学は、これまで実業界や経済界に多くの人材を輩出してきました。その中で、美術、文学、音楽などの芸術ジャンルの研究を主体とする河村ゼミには、異色のゼミ生が集まってきました。卒業論文を指導する「共通ゼミ」が、当時は学生の所属する学部に縛られず、現在よりも比較的自由に取れる時代でした。

このゼミの出身者から、文化や芸術に携わるマスコミ関係者、音楽や演劇を実践する芸術家、美術館学芸員、芸術に関わる大学教員などが多数生まれています。狭い意味でのアカデミズムにとどまることなく、社会のさまざまな現場に身を置いて活動しながら、広い意味における社会の中の芸術について考えをめぐらせる顔ぶれが、研究会というかたちで新たに集ったのでした。

毎年、6月頃と11月頃に研究会やシンポジウムを開催し、2017年2月までに計16回を数えるまでになりました。2012年度からは言語社会研究科の小泉順也先生のゼミも活動に参加するようになり、世代を越えた運営が始まっています。当初は河村ゼミの関係者に限っていた会員は、現在では複数の大学に広がりました。さらに詳しい内容や今後の活動については、以下のウェブサイトをご覧ください。会員でない方々の参加も心から歓迎しております。 [Website] <https://artsandsociety.jimdo.com>

## 用語解説

### ケルムスコット・プレス

1891年、ウィリアム・モリスが「理想の書物」を印刷・出版するために設けた私家版印刷工房。その名は、モリスがロンドン郊外ハマースミスに持っていた自宅、ケルムスコット・ハウスにちなんでつけられた。設立から約8年間で、全部でおよそ2万冊、ヴェラム（高級な皮紙）に刷られたものはおよそ700冊にのぼる。1896年、モリスの死後2年を経た1898年まで存続した。つまりケルムスコット・プレスはモリスの最後の仕事とも言うべきものである。

ケルムスコット・プレスは、「鮮明で読みやすい印刷面」と「活字を芸術家がデザインすべきこと」「印刷面の周囲に余白を確保すること」を原則として、印刷には木版を採用した。黒インクが映える手漉き紙を使用、モリス自身が手掛けた二つの字体と644のイニシャル、オーナメントを考案した。挿絵にはウォルター・クレイン、アーサー・ジョセフ・ガスキン、エドワード・バーン＝ジョーンズらが起用された。19世紀末から20世紀まで少部数出版の私家版が数多く生まれたが、いずれもケルムスコット・プレスの影響のもとにあるとあって過言ではない。

### ウジェーヌ・ドラクロワ 《ファウスト》

フランス版『ファウスト』には、ドラクロワによる挿絵がつけられた。この挿絵を制作するにあたり、1825年のイギリス旅行が大きな影響を及ぼしている。ドラクロワはその旅先で、有名な俳優ダニエル・テリーが主演を務めるゲーテ作品を劇場で観た。イギリス改作版の『ファウスト』の主役は、ファウスト博士ではなく悪魔メフィストフェレスであった。

まず1826年から1827年に最初のシリーズが完成された。1828年、作中の主たる場面を描いた17点のリトグラフをつけたものがフランス版として出版されている。この作品群は同じくドラクロワが制作した《ハムレット》(1834～48)と並んで初期のリトグラフ作品の傑作とたたえられている。

### ギュスターヴ・ドレ

フランスの挿絵画家、画家、版画家、彫刻家。1832年、アルザス地方のストラスブールに生まれた。早熟な天才と呼ばれ、15歳で両親とともにパリを訪れた際に出版社に作品を売り込み、翌1848年には最初の石版画集『ヘラクレスの難行』を刊行した。ラブレーの『ガルガンチュアとパンタグリユエル物語』の挿絵で成功したときには22歳という若さだった。次いでバルザック『艶笑滑稽譚』、ペロー『妖精物語』、『ミュンシュハウゼン男爵の冒険』の挿絵を担当した。30歳代でセルバンテスの『ドン・キホーテ』、ラ・フォンテーヌ『寓話集』、ダンテ『神曲』などを、40歳代でコールリッジ『老水夫の歌』、アリオスト『狂えるオランダ』などの挿絵本を出版。1882年、52歳で死去。死後に彼の挿絵の入ったミルトン『失楽園』、ポー『大鴉』が刊行された。

## 雑誌『ザ・ステュディオ』

1893年創刊の、アーツ・アンド・クラフツ運動を母体としたロンドンの美術工芸雑誌。その創刊号にオーブリ・ビアズリーの作品を掲載し、ビアズリーの名を一躍有名にしたことで知られている。1897年には、編集長であるグリーン・ホワイトによるグラスゴー派のデザイナーたちについての記事が掲載された。これによりグラスゴー派の名が広まる。ウィーン分離派のメンバーはこの記事を見たことがきっかけで分離派8回展に彼らを招いている。イギリス国内においてよりも、国外での反響の方が大きかったと言われている。

## 石版画

英語ではリトグラフと呼ばれ、石を意味するギリシア語に由来する。1798年頃、ミュンヘンでアロイス・ゼネフェルダーにより発明された版画の技法。浸透性のある石（後には金属板も使用された）に油性のクレヨンや脂肪性の材料で図柄を描いて定着させ、版全体を湿らせてインクをかけると、油性の図柄部分だけにインクが吸着する。それにプレス機を掛けて図柄を転写する。

当時識字率が向上したことで印刷物の需要が高まり、ひとつの版から多数刷ることができる石版画の技術は商業的にも大いに利用された。また、木版や銅板と違い、版面に凹凸を作ることなく素描する要領で図柄を描くことができるため、画家には受け容れられやすかったとも考えられる。発明から数年の間に、ヨーロッパの主要な都市に広まった。

## 木口木版

木版画は、板目木版と木口木版に分けられる。一本の木を縦方向に切り出した正目の板を使う板目木版に対し、木口木版は木目がつまって堅い樺や柘植、梨、楓の木を、年輪が同心円状に見えるように輪切りにし、ビュラン（刃の先端が斜めに切り落とされた道具）で彫る。西洋木版とも呼ばれる。

イギリスでは15世紀後半以降、文字には活版、挿絵には木版が使われていたが、17世紀になると銅板による挿絵が主流となる。18世紀後半に木口木版を改良し復活させたのがトマス・ビュイックである。木口木版には、版木が堅いので精密な線刻ができるという特徴がある。また、銅板より仕上がりが早く経費も安いことに加え、平圧プレス機で活字と同時に印刷できることから、書籍の挿絵として発展した。こうして、19世紀には銅板に代わって木口木版が主流となり、ジョン・テニエルやディエル兄弟のような人物が活躍した。

多色刷りは長い間その技術がなく、印刷したあと手作業で彩色していたが、19世紀中頃には多色石版刷りが主流となった。木口木版の多色刷りの技術がイギリスで開発されたのは19世紀後半のことで、その技術者としてエドモンド・エヴァンズの名が知られている。

出品リスト

番号	著者名、作者名（挿絵）、『書名』、刊行年、メディア、サイズ、都市名（原語表記）
1.	ルドヴィーコ・アリオスト、ギュスターヴ・ドレ（挿絵）、『狂えるオルランド』、1879年、木口木版、43.9 x 34.0 cm、パリ。（Ludovico Ariosto; Gustave Doré, <i>Orlando Furioso</i> ）
2.	エドワード・C・バーンニジョーンズ（挿絵）、『ユリアナ聖書』【挿絵 100 点】（3 巻本）、1900 年、石版・その他、51.9 x 41.5 cm、アムステルダム。（Edward Coley Burne-Jones, <i>Juliana Bijbel</i> 3vols. [100ills.])
3.	アドルフ・ジュリアン、アンリ・ファンタンニラトゥール（挿絵）、『リヒャルト・ワーグナー』、1886 年、石版、パリ。（Adolf Julian; Henri Fantin-Latour, <i>Richard Wagner: sa vie et ses œuvres</i> ）
4.	ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ、ウジェーヌ・ドラクロア（挿絵）、『ファウスト』、1828 年、石版、22.1 x 18.1 cm、パリ。（Johann Wolfgang von Goethe; Eugène Delacroix, <i>Delacroix - Faust</i> ）
5.	ジョセフ・フランソワ・ミショー、ギュスターヴ・ドレ（挿絵）、『十字軍の歴史』（2 巻本）、1877 年、木口木版、44.0 x 32.3 cm、パリ。（Joseph François Michaud; Gustave Doré, <i>Histoire des Croisades</i> ）
6.	ケルムスコット・プレス、エドワード・C・バーンニジョーンズ（挿絵）、『ジェフリー・チョーサー作品集』、1975 年、木版（ファクシミリ版）、ロンドン。（Kelmscott Press, Edward Coley Burne-Jones, <i>The Works of Geoffrey Chaucer Now Newly Imprinted</i> ）
7.	オーブリー・ビアズリー、『丘の麓で、その他 韻文・散文集』、1904 年、38.3 x 28.1 cm、ロンドン（Aubrey Beardsley, <i>Under the Hill</i> ）
8.	ウィリアム・モリス、エドワード・C・バーンニジョーンズ（挿絵）、『クピドとプシケの物語』、1974 年、木版、35.0 x 24.9 cm、ロンドン（William Morris; Edward Coley Burne-Jones, <i>The Story of Cupid and Psyche</i> ）
9.	『ザ・ステューディオ』（創刊号）、オーブリー・ビアズリー（挿絵）、《オスカー・ワイルド『サロメ』》、1893 年 4 月、ライン・ブロック、30.1 x 21.4 cm、ロンドン。（ <i>The Studio</i> , vol.1, no. 1, Aubrey Beardsley）
10.	ウィリアム・アリングガム、リチャード・ドイル（挿絵）、エドモンド・エヴァンズ（版刻）、『妖精の国にて』、1870 年、多色木版、38.3 x 28.1 cm、ロンドン。（William Allingham; Richard Doyle; Edmund Evans, <i>In Fairy Land: a series of pictures from the Elf-World</i> ）
11.	ロバート・ブレア、ウィリアム・ブレイク（挿絵）、『墓』（ブレイク挿絵版）、1808 年、エッチング、Rivière 装丁版、34.5 x 28 cm、ロンドン。（Robert Blair; William Blake; Luigi Schiavonetti, <i>The Grave, a Poem</i> ）
12.	アルフレッド・テニスン、ウィリアム・ホルマン・ハント、ジョン・エヴァレット・ミレー他（挿絵）、『詩集』、1857 年、木口木版（ディエル兄弟他）、22.2 x 16.3 cm、ロンドン。（William Holman Hunt; Sir John Everett Millais, <i>Alfred Tennyson: Poems</i> ）
13.	アドリアン・ムロー、『モロー兄弟』、1893 年、グラヴェール、26.5 x 19.5 cm、パリ。（Adrian Moureau, <i>Les Moreau</i> ）

14.	マイケル・フィールド、『ユリア・ドムナ』、チャールズ・リケッツ（装丁・挿絵・版刻）、1903年、木口木版、15 x 24 cm、ロンドン。（Michael Field; Charles Ricketts, <i>Julia Domna</i> ）
15.	トマス・ビューイック、『動物誌』（第2版）、1791（1790）年、木口木版、21.5 x 14 cm、ニューカースル。（Thomas Bewick, <i>A General History of Quadrupeds</i> ）
16.	ジョン・ラスキン、『ベニスの上』（1～3巻）、『建築の七燈』（4巻）、1851-53年、石版・木版、Crederic Chivers 装丁版、ロンドン。（John Ruskin, <i>The Stones of Venice / The Seven Lamps of Architecture</i> ）
17.	ウィリアム・シェイクスピア、ジョン・ギルバート（挿絵）、『シェイクスピア著作集』（3巻本）、1857-60年、木口木版（ディエル兄弟）、25.0 x 18.4 cm、ロンドン。（William Shakespeare; Sir John Gilbert, <i>The Works of Shakespeare, 3 vols.</i> ）

言社研レクチャー シリーズ「本をめぐる物語」2

Kコレクションが誘う美本の世界 - 河村錠一郎先生の歩みとともに

監修 河村錠一郎（一橋大学名誉教授） 小泉順也（言語社会研究科准教授）

協力 宮本康雄（言語社会研究科博士後期課程 / リサーチ・アシスタント）

豊丹生彩莉（言語社会研究科修士課程 / ティーチング・アシスタント）